

山桜の里 戸赤

**収穫祭で
作業慰労と
話し合い**



前日からの準備に感謝



集落の7割出役、行政区に生産組合、青少年育成会も協力

**「携帯を使えるように」
この声届けたい**



手打ちそば、熊肉のしぐれ煮など
話題に花を添えた

「熊汁で収穫祭を」との計画が十一月二十五日共同作業の慰労会を兼ねやまざくら学校でおこなわれました。
熊肉を軟らかく調理するため前日から



モロコシ団子、カヤの実、漬物なども持ち寄った味にも話題沸騰

櫛小の木地体験
木に触れて
森林の大切さを学ぶ

櫛小五年生の授業で三十人が木地挽き体験を楽しみ、世界に一つしかない自分の作品を持ち帰りました。森



15世帯20人参加

みんなに呼びかけ
希望者のための
「初春顔合わせ」を
計画しませんか

林の大切さを学ぶ
という声が強く出
されました。



11月19～20日、櫛小5年2クラスが体験

ため木と触れ合う
ことを目的にした
県の補助事業を取
り入れて毎年実施
している、ことしは
小鉢を作りました。



木土工房の奥さんも講師にひと役

県職員で花豆パイ

南会津合同庁舎等の職員の皆さんに花豆パイがあっせんされ、11箱とバラ104個を買っていただきました。地元の新商品を知ってもらおうと観光情報誌に掲載された産品を参考に地域振興の担当で取り計らったものです。



写真:木工ろくろで使うカンナの説明(櫛原小、江川小、下郷中で木地体験、木製そりの制作と滑走、小枝を使っての木エクラブなどそれぞれ行われている)

【木の学習No.26】…近世前期に吾妻山麓から飯豊山麓にかけて存在した耶麻郡の木地小屋は、既に定着、農民化への道を辿っており、経済的には木地業に依存しながらも、農業も行うという兼業を維持しつつ、幕藩体制の終末期に続いていく。一方、江戸幕府領の通称御蔵入りの地が耶麻郡の木地小屋の数をしのぐようになってくる。この地の一大拠点になった所が針生七ヶ岳山麓であった。広大なブナ林帯に新天地を求めてやってきたのは、天栄村湯小屋(現・二股温泉)や羽鳥板小屋の木地師達であった。前期から中期前半にかけての特徴は、大きなグループで「飛」をすることであった。延享三(1746)年の「蛭谷氏子駈帳」は、針生木地三三軒を記録している。二〇〇人前後の大所帯であっただろう。それだけの木地業をささえる原木が豊富にあったからである。また、耶麻郡黒岩小屋から宝暦六(1709)、七年の二度にわたって大沼郡昭和村小野川見沢へ「飛」をしている。一六軒一〇七名であった。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (つづく)



花豆パイは何年もかかり 生まれた背景など説明



J A しらかわ集落営農セミナーで、
県南農林事務所か
ら事例発表の依頼
を受け、戸赤の花
豆パイ誕生の経過
や地区の取り組み
を発表しました。

花豆パイの事例発表 JA しらかわ集落営農セミナー

「むらおこしが成功してるかどうかは、物や形も大事だが、関わる人間とつながりがあれば進まないのではないかと実感を感じました。」



基調講演は「将来への危機感から動き出したビジョンづくり」(右手県笹間地区営農再生対策会議事務局長大和章利氏)

花豆栽培講習会

下郷町戸赤地区
戸赤村づくり実行委員会

1 下郷町戸赤地区について
 総面積31,709haと広大な面積を有する下郷町は、中山間高冷地での冷涼な気候を生かした野菜・花きを主体とする園芸作物の生産が盛んで、周辺の山々には杉などを中心にした植栽が行われています。
 『戸赤地区』は「戸石」「赤土」「木地小屋(地名)」が合併してできた地区。町の西に位置し、周囲を山に囲まれた小さな集落で、かつては漆器の木地(ベースとなる木製の器)づくりで栄えました。

2 活動のきっかけ
 平成15年度「元気な町づくり支援事業(町単独事業)」を契機として、地区住民(21世帯/52人)で、「ここにある自然・文化、歴史を振り返り、このままの集落を後世に受け継ぐためのむらづくり」を基本理念として発足しました。
 行政区長が委員長を兼務し、地区消防団、隣人消防隊、地区歌会、生産組合等の各組織が一体となり、活動を展開しています。

3 活動の内容
 様々な地域資源(山桜の再生地や学校校舎、広葉樹林など)を活かした地域づくりを行っています。また、これらの取組みをホームページ・機関紙(月1回発行)等を通じて積極的に情報を発信しています。

【主な取組み】
 ◆「やまざくら祭り」
 集落の外からも多くの観光客が集まるイベントになっています。集落で採れた産物の販売などを通じて、観光客とのふれあい、特に高齢者をはじめとする集落住民の生きがいづくりにつながっています。

◆「水車式木地工房」の管理運営
 (H16整備、H18より本格稼働)
 昭和初期に途絶えてしまった木地づくり技術を伝えるため、木地師を目指す地区の住民等が常駐しながら、製作した木地を販売しています。

◆滞在型交流施設「やまざくら学校」
 平成16年に廃校となった(旧)戸赤分校を、宿泊・展示施設を兼ね備えた施設に改修し、宿泊客の食事・もてなしなど、交代制で協力しながら運営しています。

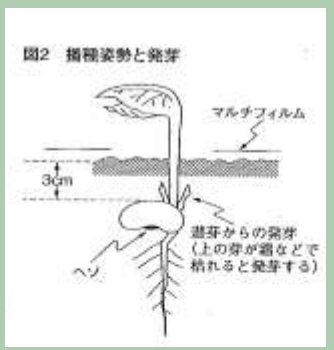
◆炭焼き技術の伝承
 平成16年に炭焼き技術の継承と広葉樹林の有効活用を目的に「白炭窯」を整備しました。技術者2名が後継者を育成しながら、炭焼き体験交流事業等を行っています。

4 花豆(ベニバナインゲン)の生産と商品づくり
 自家用などに作付が行われてきた「花豆」を地域の宝と捉え、平成15年頃よりスイーツの開発に取り組みできました。
 外部の専門家の意見を聞き、物産展でのテスト販売を行うなど商品開発のステップを踏みながら、ついに今年の7月、商品化を実現しました。
 花豆の生産を熱心に続けた戸赤地区の人たちや、その熱意に応えた加工業者の方々など、開発に関わった方々の努力の賜物です。
 そんな想いが込められた、外はふわふわサクサク、中はしっとり「花まめパイ」を召賞味ください。

5 今後の展開
 山桜、木地と漆、炭焼きを中核としながら、自然体験交流施設の拠点として「やまざくら学校」の利用度を高め、グリーンツーリズムで地域の再生を進めていきます。

試飲・試食が準備され、県内の農産物特産新製品の現物と壁新聞で各方部の活動内容が紹介された

(花豆の学習№25)花豆(ベニバナインゲン)の栽培 (2)播種 ・ポットに1粒、播きとする。・播種前に種子を水浸すと腐敗したり発芽不良になる危険性があるので、水浸は行わない。・種子のへそ(へこんだ部分・図2)を下にして播く。○苗数：740本/10aあたり(植栽条件：条間200cm、畦間100cm、株間90cm、播種は必要苗数より1割分余分に行う) (3)育苗 ・播種直後はポット温度を25℃前後に保ち、発芽が始まればポットトンネルの片側を開き、徐々に温度を下げる。 ・床温(地温)は発芽まで25℃(20~25℃程度確保)、発芽直後に22℃とし、その後徐々に下げ最終的な地温は15℃程度とする。 ・35℃以上の高温では発芽率が著しく低下するため、ハウストンネルを適宜換気する。育苗中の気温は最高25℃程度とし、最低気温15℃以下にならないよう夜温の確保に努める。 ・定植7日前よりポット温度を15℃に下げ自然に馴らす。 ・灌水は極力控え乾燥気味に育苗する ・ポットずらしは葉が重ならない程度に行う。 ・定植前後は多灌水とする。 ・育苗日数は18~24日で定植する。(南会津農林事務所農業振興普及部資料から)〈つづ〉



灌水は極力控え乾燥気味に育苗する